

優秀賞

気づくことが第一歩

福井県 南中山小学校 六年

見延 枇真璃

私の集団登校班は、2年生から6年生まで合わせて11人。しかし、だれよりも元気なもう一人のメンバーがいる。見守り隊の孝代さんだ。外に出たくないような暑い夏の日やどしゃぶりの雨の日、雪が降って歩きにくい冬の日であっても、安全な場所まで毎日いっしょに歩いてくださっている。おどろくことに、八年もの間、集団登校の見守り隊として活動されているのだ。しかも、ただいっしょに歩くだけでなく、

「今日は、暑いから水分をしっかりとってね。」「雪がたくさんあるから気をつけて。」と、毎日のように班の全員に声をかけてくださっている。

「気をつけてね。行ってらっしゃい。」

見送りポイントで必ず聞くこの言葉もまた、毎日かけていただいているというのに、私はうまく返事をする事ができずにいた。家族でもないのに「行ってきます」と言うのは、ほかの子に変だと思われなかと気になるからだ。班長の私が返事にもたついているせいか、だれも言葉を返さない。まるで何も聞こえなかったかのように。

このままではダメだと悩んでいるとき、頭に浮かんだのは、毎朝必ずひとことみんなに声をかけ、旗を持って道路の真ん中に立ち、笑顔で私たちをわたらせてくださる孝代さんの姿だった。安全に道路をわたらせてもらっているだけでなく、今日も元気に一日をスタートしなさいよと、背中を押してもらっていたことを思い出した。

そして、返事ができなかったのは、ただ人の目が気になるからではなく、声をかけてもらうことをあたりまえのことと思いはじめている自分がいたからだ気づいた。

翌朝、いつものように「行ってらっしゃい」と声をかけてくださる孝代さんに、「行ってきます」と返してみた。少しはずかしくて声が小さくなってしまったが、孝代さんがいつも以上の笑顔になったのを見て、勇気を出して実行してよかったと、心がスッキリした。

その次の日も同じように返事をする、登校班のみんなも「行ってきます」と返すようになった。孝代さんを思う気持ちで全員がつながったと思ったら、私の心がぽかぽかと温まるのを感じた。今では、ほかの見守り隊の方にも「行ってきます」と言えるようになった。

後日、孝代さんに見守り隊をやってよかったことは何かをたずねると、「子どもたちの顔を一人ひとり見られて、いろんな話ができること」という答えが返ってきた。見守り隊の活動は、特別な何か返ってくることを求めて行われるのではないと改めて知り、やさしさあふれる答えに、私の笑顔もあふれた。

私は、あたりまえだと思っていることの後ろには、だれかの思いやりの心があることに気づくことができた。そして、相手の思いやりに気づくことが、行動へ移す第一歩になると学んだ。

コロナによって人と関わる機会が大きく減った今だからこそ、身近な人から受け取る思いやりについて考えようと思った。